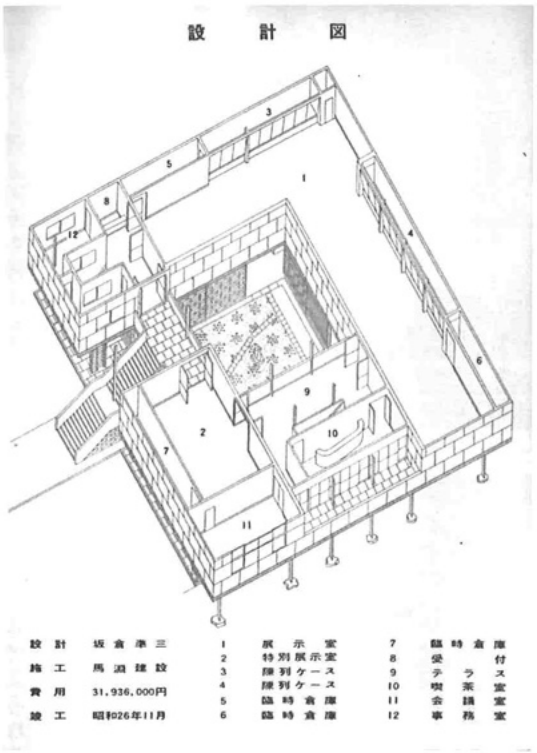
「近代」美術館の誕生——鎌近神話創世記

森　仁史

一九五一（昭和二十六）年十一月十七日（土）神奈川県立近代美術館（以下、鎌近）が鎌倉駅近くの鶴岡八幡宮から無償提供された境内二〇〇〇坪の敷地に開館した。同館はその業績の偉大さに反して、記念誌めいたものを作成しておらず、『日本近代洋画と神奈川県立近代美術館』（朝日新聞社、昭和五十八年）、『資料・展覧会総目録１９５１—１９８１』（同館、一九八二年）、『小さな箱　鎌倉近代美術館の50年　1951-2001』（求龍堂、二〇〇一年）くらいが思い浮かぶ程度なのだが、それもこの美術館らしいとも思える。



1　設計図（『神奈川県立近代美術館鎌倉案内』1960年所収）

鎌近は開館に際して、国内に所在する油彩二十七、水彩七、デッサン四、版画四点を集めて、「セザンヌ・ルノワール展」を開催した。同日から「藤川勇造展」も開かれ、さらに加えて二十七日から特別展示室〔図1参照〕で三十七点で構成される「黒陶・彩陶展」も開催した。特別展示室ではこのように主となる展示とは別な展覧会が催されることが多かった。一九五六年までの六年間だと、展示室の企画展四十八に対し、二十八回の展覧会が開かれている。六月二十五日に神奈川県立近代美術館条例が公布されているから、神奈川県庁に椿事務局長と柳生、佐々木が学芸担当して勤務し始めた時には準備事務局ではなく、美術館組織が発足していたことになる。彼らの初仕事は開館に先立って、七月二十五日から横浜市伊勢佐木町の湘南デパート七階ホールで「第一回巡回複製展」を開催することであった。オランダ、バロック、印象派以後の四十三点を展示したところ、入場者が六千人に達して、会期を一日延長するほどであった。少し遅れて、大河内が開館展準備の頃に採用された。美術館開設当初のスタッフを鎌近と国立近代美術館とを比較してみれば、その規模の違いがはっきり分かるだろう。

職員のうち土方、椿が正規の事務吏員であったほかは、佐々木、柳生は地方公共団体の身分としては事務補助という立場になる雇員であったようで、小所帯であるばかりでなく、きわめて劣悪な雇用状態であった。また、博物館法がこの年十二月に施行される以前であったから、当然学芸員と言う身分も与えられなかった。電気や券売などは非常勤でまかなわれていた。

美術館職員構成

	神奈川県近美（10）	国立近美（33）	
館長	嘱託　村田良策	岡部長景	
補佐	副館長　土方定一	次長　今泉篤男	
学芸	雇員　佐々木静一 柳生不二雄 大河内菊雄（十一月―）	事業課長　河北倫明 陳列保存係（2） 渉外調査係（2） 普及弘報係（3）	
事務	事務長　椿千之	庶務課長　風間勇美 庶務係（5） 会計係（5）	
技労	電気、監視（4）	電気ほか（12）	

我々はいつも最初の近代美術館は国立近代美術館に一年先駆けて、地方の公立施設として開館したのだと語るのだが、それは「判官贔屓的気分」だからではない。国立施設と同様、公立機関の設立にはそれなりの合意形成と手順を踏む時間が必須だからである。そもそもは神奈川県に一九四九（昭和二十四）年六月県展予算が組まれて、八月八日知事公舎に県内在住作家、評論家十名ほどが集められ、その準備が論議することから始まった。このなかで、美術展示施設が必要だということで意見が一致し、村田良策（鎌倉市在住、東京藝術大学美術学部長）を中心に、三十三名からなる神奈川県美術懇話会が設けられ、美術館の実現の具体策を検討することになった。翌年度予算に美術館建設経費二八五〇万円が計上、可決され、美術館建設委員会が設置された。国立近代美術館設立の動きは建設経費が予算計上された一九五〇年一月が最初なのだから、明らかに神奈川県の動きは国に先駆けていたのである。

当時の神奈川県知事内山岩太郎（一八八〇―一九七一）は一九一二年スペイン公使館を皮切りに南北米、パリ、ベトナムなどで長く外交官を勤め、一九四六年一月最後の官選知事に選任され、翌年最初の知事公選に無所属で出馬し、社会党、自由党の対立候補を破って当選していた。この後、一九六七年まで五期連続で知事を務め、地方行政に大きな足跡を残すことになる。内山のパリ在勤時代（一九一九―二一、二七―二八、三七年）には、三〇〇人いたと言われる日本人美術家たちを積極的に支援し、自宅の壁面いっぱいになるほど絵を買って掛けていたという夫人の思い出話を土方定一が書き残している（『光あらたに内山岩太郎追慕の記』同刊行委員会、昭和四十七年）。

たまたま準備を始めた一九四九年に横浜市野毛山、反町両公園を会場とする日本貿易博覧会（三月―六月）〔図2〕が開催されており、この観光館を美術館に転用してはどうかという意見が出され、吉川逸治、吉沢忠、川口謙二（社会教育課長）が実地検分したが、狭すぎて不適当と言う結論であった。吉川と佐藤敬とが美術館建設について内山知事と話し合い、一九三七年パリ万博の日本館を設計した坂倉準三の名が挙がったようだ。しかし、公共工事では入札が前提となるので、前川國男、山下寿郎、谷口吉郎、吉村順三を加えてコンペが実施された。他の建築家が鉄筋コンクリート造で建築費五、六千万円だったのに対し、坂倉だけが鉄骨造、アスベストパネル張の設計案を提出し、機能としても

2　日本貿易博覧会への天皇行幸
（千頭を歩くのが内山知事）

3　鎌近俯瞰写真（『国際建築』第19巻第1号）

優れていたので、坂倉案が選ばれた。

九月十八日付で「近代美術館についてのご報告」と題された美術関係者向けの文書が孔版刷りで作成されており、活動目標（取り扱う時期、取り上げる地域、ジャンルなど）や開館後三回目までの展覧会企画の具体的な予定などが記されているので、開館前すでにかなり実務的な活動内容が固まっていたことが分かる。

地元の建設会社馬淵建設が請け負って着工されたが、当初九月には竣工の予定が十月にずれこみ、実際に神奈川県に建物を引き渡されたのは十一月五日であった。冷暖房装置がなかったので、柳生たちは館内に火鉢を並べて乾燥させる有様だった。それでもやはり乾燥は十分ではなく、開館直後の「黒陶・彩陶展」開催中に天井が剝がれ落ち、ガラスケースが壊れ、作品が破損してしまう事態となった。竣工後に変更された部分もあって、『国際建築』に掲載された竣工写真（図3）を見ると、南面のテラスの壁面が明るく写っており、イエローオーカーに塗られていたことが分かる。これは「清潔な白亜のマッスと甚だしく不調和」（池田克己）だと評され、後に塗り替えられたようである。写真から、建物の参道側の地面が土盛りされている様子が見えるが、ここには多くの木杭が打ち込まれ、のちにも季節になると無数の羽根蟻が飛び交ったという青木同人の昔話が裏付けられる。また、前記設計図では、展示室と特別展示室との間の空間も彫刻展示室と記されている。坂倉は竣工後にアムステルダム博物館長の言葉を引いて、美術館には「資料室、図書室保管室などのために二十五％……技術的な研究のための場所として十五％、荷造り室に二〇％」が配分されるべきだなどと得々と記しているが、これらの設備は鎌近には全く備わっていなかった。初期の学芸員の回想では、収蔵庫、荷解室、燻蒸室がなかったことにとくに苦労させられ、しばしば階段の下で荷解きしたとある。開館後十五年後の一九六六年に新館が建設されるまで、鎌近には収蔵庫はなかったのである。

＊　＊　＊

美術館には運営委員会が設置され、展覧会企画その他の事業内容の検討にあたることとされ、次のメンバーから成っていた。これも国立近美と比較してみるとその違いが分かりやすい。この顔ぶれは職員と

運営委員会委員

神奈川県近美（14）	国立近美（11）
（美術館）村田良策館長、土方定一副館長（県）内山岩太郎知事、中村新一教育長（画家）安井曾太郎、木下孝則、佐藤敬、山口蓬春、伊東深水、中村岳稜（建築）坂倉準三（評論）富永惣一、小山富士夫、吉川逸治	岩動道行（大蔵省）、池田義信（日本映画連合会）、富永想一（学習院大）、和田新（日本美術家連盟）、吉川逸治（東京芸大）瀧口修造（評論家）、村田良策（東京芸大）、野間清六（東博）、隈元謙次郎（東文研）、山田智三郎（東京アーミー・エデュケーションセンター）、土方定一（鎌近）

4 『神奈川県立近代美術館鎌倉案内』（昭和41年）

は反対に、貧弱な美術館スタッフを補ってその運営を援助できるような作家、実務者といった実質的な人材から成っている。国立近美では大半が美術史研究者から構成されているのとは対照的である。鎌倉では諮問機関はこれだけであったが、国立近美には館長を推薦できる評議員会（一万田尚登日銀総裁ほか十九名）の設置が法令に定められ、この運営員会はむしろそうした法的根拠のない懇談組織という位置づけになっていた。

鎌近が開館十五年に作成した『案内』（図4）に、その企画運営方針として記した「鎌倉近代美術館の十五年間」（同十年間とほぼ同文）には、実質的には六項目からなる活動目標を公表している。

（1）日本および世界の近代、現代美術を紹介して、視覚を通して相互の理解を深めると同時に世界美術のなかに現代日本美術がどのように寄与するかを知らせようとする

（2）日本及び世界の古美術をできるだけ組織的に紹介し、そういう古美術のなかにある豊かな遺産を現代の眼で見つけ、われわれのなかに取り入れようとしております

（3）県下の児童教育を高めるための児童画展などを開催しています

（4）現代日本の新人を鼓舞するための新人展を臨時に開催しています

（5）所蔵作品を県下の各都市に巡回するばかりでなく、所蔵版画の巡回展を学校その他の要求によって開催しております

（6）夏季に美術講座を青少年センターで開催し、県下の現代美術のセンターとしての役割を果たしています

また、「単に彫刻、絵画に限らず、都市計画、住宅、室内装飾、写真、商業デザインなどのあらゆる美術教育に従う予定であります」とも記し、純粋美術以外の分野にも積極的に活動を展開しようとしていた。じっさいに、（2）と（6）とを併せて読めば、開館記念展が西洋画、彫刻と中国古陶磁の展示であったことがうなずける。これは「運営委員会の方針で、毎年六七月の梅雨期には、絵画の陳列をさけて陶磁器を列べること」（小山富士夫）になっていたからでもあるらしい。確かに開館翌年の五月―七月には主展示室で国内所蔵の優品七十八点で構成された中国古陶磁展が開かれた。これらの陶磁器展は殆ど小山（当時、文化財保護委員会美術工芸課）や藤田国雄（東京国立博物館）が企画を担当し、関東ばかりでなく近畿所蔵家への出品交渉にもあたり、柳生たちはその指示に従って集荷、展示したようである。また、浮世絵など日本の古美術展には近藤市太郎（東京国立博物館普及課長）が協力した。開館後五年間の展覧会の内容は『年報』一九五六年によると次のように分類できる。（＋数字は特別

ジャンル／年度	51	52	53	54	55
日本	2＋1	1＋3	2	2	2
西洋	2＋1	2＋2	2＋1	1	
古美術	＋1	2＋3	2＋1	2＋2	2
現代	＋1	4＋3	1＋1	2＋1	3
その他		1	2	1	2
計	8	21	12	11	40

展示室での展覧会）

鎌近の建物が所蔵品収蔵庫をもたず、大半が展示室で絞められた施設として開館しようとしたのであるから、当然借用品によって企画展を続ける以外にないわけで、この実行のために一方で歴史やジャンルを限定せずに展覧会を組織しようと考えたのは現実的で賢明な選択であったろう。その理由を土方は一九五二年のインタビューのなかで、「近代が我々の現代を強く主張すると同時にそれと同じ近代を過去の美術の中に見出す、と言う視野に立っている近代が当然あっていい。」と説明している。国立近美が「現代の眼」展を開催するよりも二年前に、現代から過去への眼差しに現代的な意味を見出そうとしたことは特筆に値するだろう。また、地方の公共美術館であるがゆえに、どうしても地域サービスを求められるのは避けがたいので、土方はこれを意識して、一方で「神奈川県の美術館は神奈川県の美術の相談役であり、教育機関であることは一番大事な役目だ。」としつつ、「鎌倉美術館は日本で最初に生まれた美術館なのだから、特に地方性ということを、現在のところ考えてはいない。」と明快に断定もしている。しかも、それをまさに月刊誌のような矢継ぎ早のテンポの企画展によって、実態として「近代」美術館の何たるかを世に示して見せたところにこの美術館の先駆者としての計り知れない意義がある。

このあたりのバランスをとることが（3）、（5）、（6）に表明されていると言える。一九五五年に横浜市内で開催された公開講演「生活のなかの近代美術」は翌年毎日新聞から新書として発行された。土方が構想したように「都市計画、民家、室内のモデル・ルーム、服飾」をとりあげ、「美術を海外と彫刻だけに限らないで、視覚の世界の造型的秩序全部にわたる人間生活に大切なもの」として語ろうとした意図が実現されている。展示でも、大規模展ではないが、一九五三年六月に特別展示室で亀倉雄策デザイン展、五十四年十二月に山名文夫デザイン展を開催していて、美術館としてデザイン展に先駆的に取り組んでいる。

このような前例のない美術館の不透明さと規模のためだろうか、ジャーナリズムも学会も鎌近の開館に対して左程の関心を示したとは言えない。わずかに左記の記事を挙げることができる程度である。朝鮮戦争の休戦協定の帰趨、講和条約の批准準備が連日新聞紙面をにぎわせていた日々であった。

大仏次郎「最初の地方美術館」『毎日新聞』昭和二十六年十一月二十一日
「鎌倉近代美術館・神奈川」『国際建築』第十九巻第一号、一九五二年一月
池田克己「近代美術館について」『みづゑ』第五五八号、一九五二年二月

受付としてながく勤務した菊地道子は、「昭和二六年にね、はじめて新しいデザインでできたでしょう。あのときは、みんなびっくりしたと思うよ。何だろう。何のたてものだろうって、みんなの興味が集まったと思うよ。そうかといって、あんまり誰も、入ってこれない。一人でこわくて入れない。足が踏み入れられない。」という実感のこもった回想を残している。「近代」美術館が初めて日本に出現したのだから、無理もないことであり、またその担当者の未曾有の開拓者精神によって、この地からこの後の日本の美術館の運営や活動が切り開かれたことに改めて思いを致さずにはいられない。

一寸

第六十四号　二〇一五年十一月

第六十四号目次

新・旧刊案内64　青木　茂　1
大田遼一郎の歌集『獄中にて歌へる』の始末
本の気まま談義（二）　岩切信一郎　10
横山安武・森有礼兄弟の母、
横山壮次郎・河野辰三の親子
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（20）　大谷　芳久　18
旧植民地の図画教員　旧朝鮮（三）　金子　一夫　45
慶尚北道～平安南道
未乾素描（9）　丹尾　安典　61
活版落穂ひろい（二）　銅・石版画遺聞59　森　登　72
『西医略論』或いは幕末明治初期の欧文活字本
「近代」美術館の誕生――鎌近神話創世記　森　仁史　80
麓先生座談・浮世絵の話　山田　俊幸　85
『一寸』第57号～第63号目次　90

新・旧刊案内64
大田遼一郎の歌集『獄中にて歌へる』の始末

青木　茂

■書名を『旧刊案内』という僕の駄文集を三好企画から出刊したのが、ちょうど二十年前の一九九五年十月で、『一寸』を始める時にはそれの新版という意味で「新・旧刊案内」としたが、新刊も旧刊も案内したいという気持ちも含めてであった。すでに『旧刊案内』自体案内する必要もない旧刊本になって終ったが、『一寸』の方はその時に思ったことを書き綴ってきたので、『一寸』がある限り終りようがない、前号で編集長森さんが書くように、出し続けさえすれば「不滅」かも知れない。僕も前号で「乞次号」としたので書き続けられる。

前号は図版を使わないで『日本共産党検挙秘史』のカバーのことを書いたのでここに挿図とするが、この挿図で内容は特ダネバクロ本で売れるだろう本であることが判る（再版本は見ない）〔図1〕。天草麟太郎著『日本共産党大検挙史』の架蔵本は残念ながらカバーがない（同じような図案であろうが、お持ちの方があったら見せてほしい）。発禁本だから再版本はないであろう。著者は、「近代犯罪科学全集」というこれまた大向うをねらったシリーズ物の一冊を担当した人物のようである。両書とも警視庁お貸下げと思われる被検挙者の写真を図版としているが『検挙秘史』にはなくて『大検挙史』にある図版をここに挿図とす